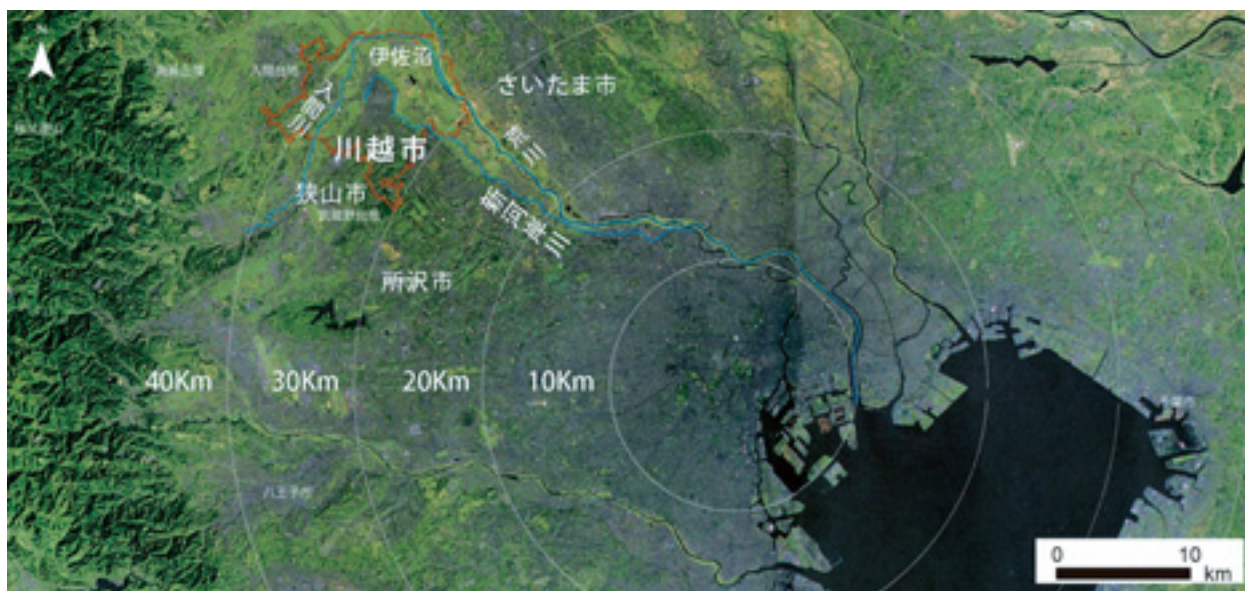


第1章 川越市の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 位置

本市は埼玉県の南西部にあり、東京都心から30km圏内に位置します。東西16.27km、南13.81km、面積109.13km²、さいたま市、狭山市など9市2町に囲まれています。市庁舎の位置は東経139度29分08秒、北緯35度55分30秒、海拔18.5mです。関東平野の中心部に位置し、市の全域が高低差の少ない平野で、荒川が市の東部を、入間川が市の西部から北部を経て東部へ巡り、新河岸川が中心市街地を取り囲むように流れています。



川越市の都心からの距離



埼玉県図

(2) 地形・地質

本市の地形は、武蔵野台地及び入間台地と、荒川及び入間川沿いの低地に大きく区分されます。弥生時代までは台地を中心に人々が居住し、古墳時代以降は低地にも集落が形成されるようになります。

地質は、未固結の堆積物^{たいせきぶつ}からなる台地と低地からなっており、武蔵野台地では厚さ約4mの関東ロームが砂礫層^{されき}の上に重なっています。台地の末端では、分布する粘土が不透水層となり、自由地下水面は比較的浅いです。

① 武蔵野台地

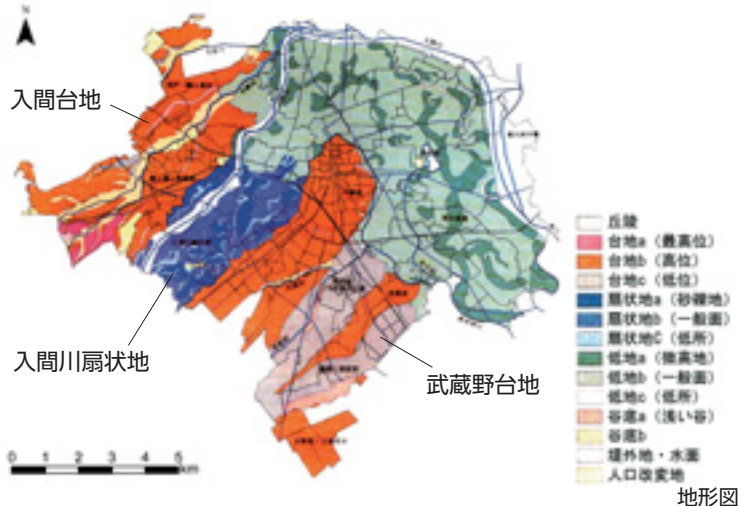
市の南部、西部から中部までが武蔵野台地上にあり、中心市街地はその北端に位置します。古代から室町時代半ばにかけては、入間川左岸の入間台地に統治の拠点が置かれていましたが、その後、市域の中心にあたる武蔵野台地の北端に城が築かれ、以後、近世から現代に至るまで、市の中心市街地は台地の北部から南部に延びるかたちで発展してきました。

② 入間川扇状地

入間川右岸の入間川扇状地は、古くからの田があり、北部及び東部は低層な沖積平野で稲作地帯となっています。台地と隣接する南西部の林野では、近世の新田開発が進み、武蔵野の雑木林の面影を残す畑作地帯となっています。また、市の東部には24haの水面を誇る伊佐沼があります。



埼玉県地形分類図



地形図

③ 河川

東・西・北の三方を入間川や荒川といった基幹の河川に囲まれ、武蔵野台地を侵食する形で赤間川や不老川が、また伊佐沼を源流とする九十川が、新河岸川に流れ込みます。また、新河岸川による舟運の便も良かったという地理的利点が、江戸への物資の供給拠点として、川越の発展を支えた要因です。



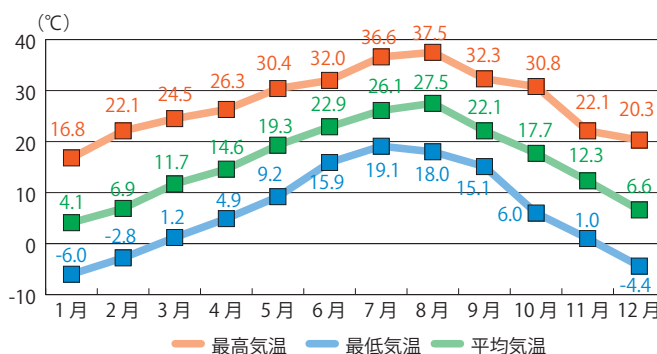
河川図

(3) 気候

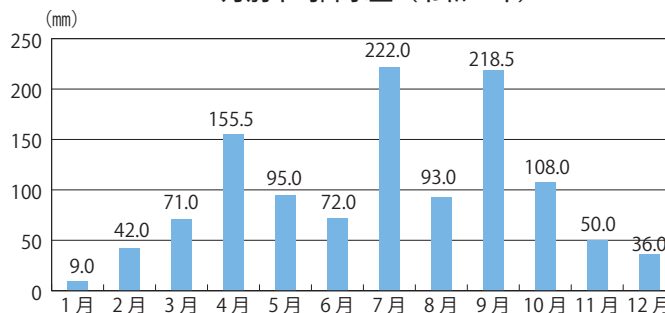
気候は太平洋側気候に属し、夏は高温多湿で南からの季節風により蒸し暑く、冬は低温小雨で北からの季節風が強くなり、乾燥します。年間を通じて晴天の日が多く、穏やかな気候で、平成30年(2018)から令和4年(2022)までの過去5年間の平均値は、年間降水量が1,334.8mm、年平均気温が16.1℃、年平均湿度が64.4%です。

乾燥した冬の季節風は、大火事をもたらす要因でもあり、大火後に行われた町割りや蔵造りの建築など、防火対策は川越城とその周辺におけるまちづくりの基本です。

月別平均気温・最高気温・最低気温(令和4年)



月別平均降水量(令和4年)



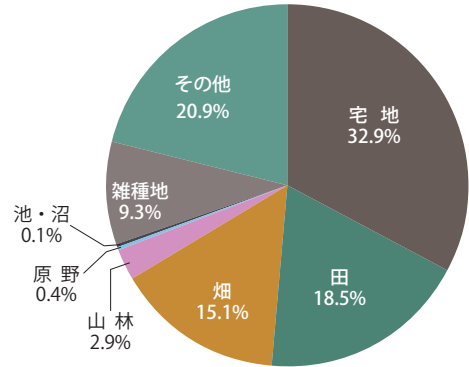
出典：統計かわごえ(気温、降水量グラフとも)

2. 社会的状況

(1) 土地利用

令和4年（2022）版「統計かわごえ」によると、本市の地目土地利用は、「宅地」が32.7%（35.71km²）で最も多く、18.6%（20.27km²）の「田」、15.2%（16.60km²）の「畑」、となっています。平成21年（2009）時点の面積と比較すると、「宅地」が1.086倍と増加している反面、「田」は0.935倍、「畑」も0.892倍と減少しており、10年間で宅地化が進んでいることがわかります。

令和4年地目別土地面積割合



出典：統計かわごえ

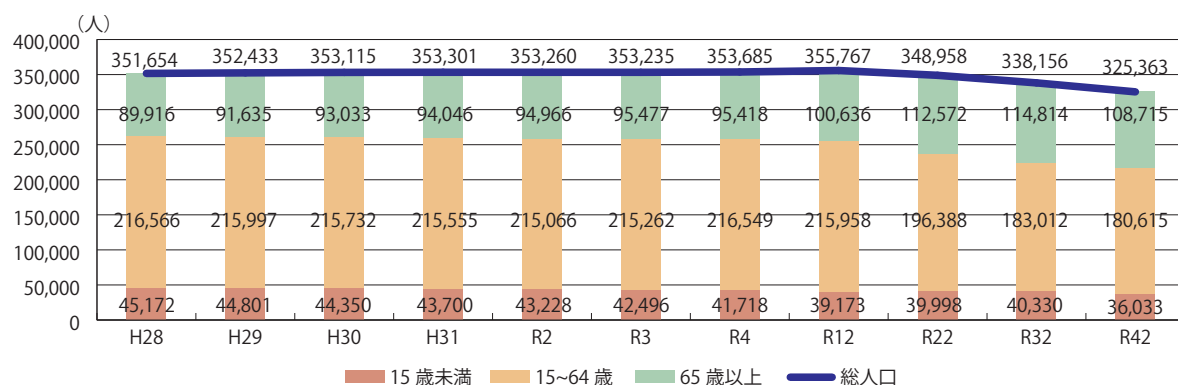


土地利用の方針（資料：川越市都市計画マスタープラン）

(2) 人口動態

本市の人口は、353,032人（令和5年（2023）5月1日現在）であり、昭和30年（1955）は10万人程度だったものが、3倍以上に拡大しており、過去5年間の数値はほぼ横ばいです。昼夜間人口比率は、96.8%（令和2年（2020））です。将来推計人口は、令和10年（2028）までは微増を続け、以後人口減少局面に転じることが見込まれ、令和42年（2060）には325,363人と想定されています。

年齢別人口と総人口の推移



出典：統計かわごえ

(3) 交通機関

鉄道は、東武東上線が南北に、J R川越線が東西に市を4分割するように通る、川越駅で交差します。また、本川越駅は西武新宿線の始発駅となっています。

バス路線は、東武バスが川越駅を起点に北部を、西武バスが本川越駅を起点に川越駅を通過して東部・南部・西部を、それぞれ結んでいます。その他、観光に特化して川越駅から北部の観光地を結ぶイーグルバスが運営する小江戸巡回バス、川越市による川越シャトルバスがあります。

道路は、市西部を関越自動車道（以下、関越道という）が南北に、首都圏中央連絡自動車道（以下、圏央道という）が市北部に接して通り、国道16号が狭山市からさいたま市へと東西に抜け、国道254号がふじみ野市から川島町へと南北に抜けています。この間を、主要地方道をはじめとする幹線道路が中心市街地から放射状に伸び、このことは川越が流通拠点として好立地だったことを示しています。



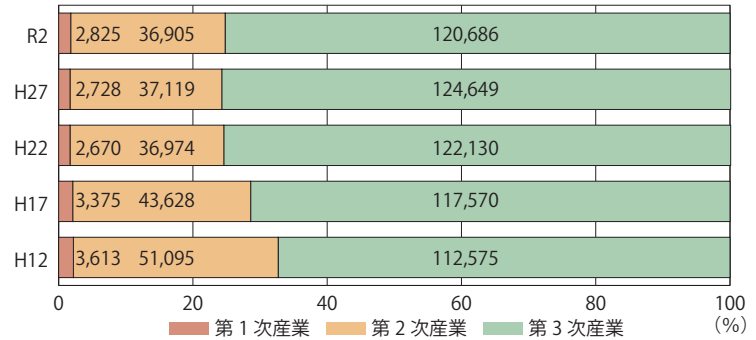
交通網図

(4) 産業

本市は地形にも交通条件にも恵まれ、農商工にバランスの取れた県南西部地域の中核都市です。古くから物資の集散地として発展した中心商業地としての歴史があり、また地場産業の近代化や計画的な工業誘致により、内陸型の工業都市として、製造業、流通業などが集積しています。

産業別の就業者を見ると、第1次産業（農林漁業）及び第2次産業（鉱業、建設業、製造業）は、平成22年（2010）まで減少傾向にありましたが、平成27年（2015）以降では増加に転じました。第3次産業（卸売・小売業、サービス業等）は、平成12年（2000）以降、増加を続けていましたが、令和2年（2020）で減少に転じました。

産業別就業者数割合

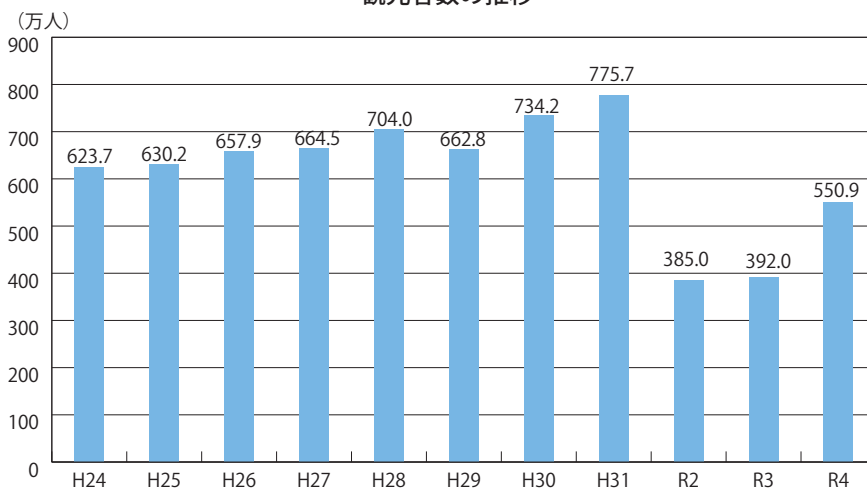


出典：総務省「国勢調査」

(5) 観光

近年は観光業も著しく発展しており、観光入込客数については平成31年（2019）に年間約775万人となっており、平成26年（2014）と比べ、100万人以上の増加となっています。新型コロナウイルスの影響により令和2年（2020）・同3年（2021）は急減しましたが、令和4年（2022）には年間約551万人を数え、回復の兆しが見えてきました。

観光客数の推移



出典：統計かわごえ

(6) 市内文化財関連施設 *これらの施設は市で管理しています**① 川越市立博物館**

川越市域の歴史・考古・民俗を取り扱う人文系総合博物館として平成2年（1990）3月に開館しました。市内の貴重な文化財を収集、保管、展示するとともに、博学連携事業を進める拠点施設としての側面も持ち、市内の小中学校の学習の場として活用されています。

**② 川越城本丸御殿（県指定）**

河越城は、長禄元年（1457）に上杉持朝の命により、家臣の太田道真・道灌親子が築いたことが始まりと言われています。本丸御殿は現存する唯一の建物で、嘉永元年（1848）に建てられたものです。玄関・大広間・家老詰所が残り、川越藩17万石の風格が偲ばれます。

**③ 川越市立美術館**

川越市市制施行80周年に当たる平成14年（2002）12月に開館しました。郷土出身作家並びに郷土にゆかりのある作家の美術品を中心に作品を調査・収集・展示しています。川越の文化活動の中核として、市民がいつでも自由に利用し、鑑賞、創作、発表を通じて積極的に美術に親しむことができる、開かれた美術館をコンセプトとしています。

**④ 川越まつり会館**

毎年10月に行われる国指定重要無形民俗文化財・川越氷川祭の山車行事を、いつ訪れても体感できる施設として、平成15年（2003）9月に開館しました。館内には祭りに曳き出される実物の山車2台を展示しており、大型スクリーンによるまつり当日の映像上映を行っています。また、日曜祝日には祭囃子の実演があります。

**⑤ 旧山崎家別邸（国指定）**

川越の老舗菓子屋「亀屋」の五代目である山崎嘉七氏の隠居所として建てられました。陸軍大演習などで川越付近を訪れた皇族方が宿泊するなど、川越の迎賓館のような役割も担いました。庭園は平成23年（2011）2月に国登録記念物（名勝地）に登録され、建物は令和元年9月30日に国重要文化財（建造物）に指定されました。



⑥ 旧川越織物市場、旧栄養食配給所（市指定）

旧川越織物市場は、明治43年（1910）に川越の織物流通業界の巻き返しのため建設されました。旧栄養食配給所は、昭和初頭に、織物や生糸関係の工場で働く人へ食事を配給するため開設されました。ともに平成17年（2005）に市の文化財（建造物）に指定されました。復原工事を行い、令和6年春から、クリエイター等の活動を支援する文化創造インキュベーション施設として活用します。



⑦ 川越市産業観光館（小江戸蔵里）（国登録）

旧鏡山酒造の酒蔵を市が取得し、改修工事を行った後に、地域の特産物などを提供する飲食・物販施設として平成22年度から活用しています。この敷地内にある酒蔵3棟（明治蔵・大正蔵・昭和蔵）は、平成20年（2008）に国の登録有形文化財になりました。



⑧ 時の鐘（市指定）

江戸時代初期、川越藩主酒井忠勝により創建されたもので、大火による焼失を繰り返し、現在の時の鐘は明治26年（1893）の川越大火の翌年に再建されたものです。平成27～28年度に耐震化工事を実施しました。小江戸川越のシンボルとして、1日に4回、伝建地区やその周辺に鐘の音を響かせています。



⑨ 原田家住宅（市指定）

川越大火後の明治30年（1897）に上棟され、米穀問屋原田家（屋号足立^{あだよう}）が建てた土蔵造町家です。原田家は埼玉県一帯を商圏とした大店で、屋根の箱棟^{はこむね}や巨大な鬼瓦^{かげもり}と影盛が乗り、川越における豪勢な町家の一例として貴重です。令和3年より川越市が所管しています。



⑩ 蔵造り資料館（旧小山家住宅、市指定）

明治26年（1893）川越大火直後に、煙草商を営む小山家（屋号万文）が建てた土蔵造町家です。昭和52年（1977）から川越市文化財保護協会により蔵造り資料館として公開され、昭和58年に教育委員会の所管となりました。現在、耐震化工事が行われ休館中です。



⑪ 永島家住宅

江戸時代後期中級武士の屋敷で、当時に近い状態で残っている県内唯一の事例です。平成18年（2006）3月に敷地を含めて市の文化財（史跡）に指定されました。現在は毎週土曜に庭園の公開を行っています。



⑫ 川越城中ノ門堀跡（県指定）

川越城の築城は、長禄元年（1457）ですが、こちらの中ノ門堀は、慶安3年（1650）から承応2年（1653）に、川越藩主松平信綱により城の拡張工事に伴い築造された堀と考えられます。明治以降、旧城内の宅地化が進む中、埋め立てられず唯一残された堀跡です。平成22年度から公開しています。



⑬ 国指定史跡河越館跡史跡公園（国指定）

河越館跡は、平安時代末から南北朝時代にかけて武蔵国で勢力を誇った武士である河越氏の居館跡です。この史跡の保存を図るとともに、郷土学習の場、市民の憩いの場として活用するために一部の整備を行い、平成21年（2009）11月15日に開園しました。現在は史跡全体の整備を行うために保存活用計画の策定を進めています。



⑭ 名細出土品整理室

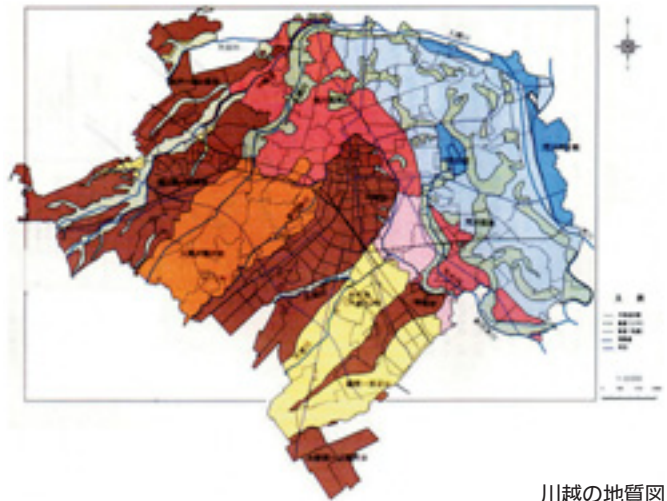
市内で実施した埋蔵文化財発掘調査出土遺物や作成図面類の整理作業を行うための施設です。調査報告書作成までの作業を行っています。また、出土遺物のうち、貸し出しの要望が多い一部の貴重な資料の保管をしています。



3. 歴史的背景

(1) 原始・古代

本市は、市域の南から西側に武蔵野台地と入間台地が、北から東にかけて荒川と入間川による沖積低地が広がっています。市域の中央部にあたる武蔵野台地北端部は川越台と呼ばれ、おおむね平坦な地形です。



川越の地質図

① 川越に人が住み始めたころ

川越市域に人が住み始めたのは、旧石器時代で、川越台の端に位置する名細地区の下小坂・吉田や本庁地区の仙波町では、ナイフ形石器や尖頭器などが発見されています。

縄文時代早期には2～5軒の竪穴建物で集落が形成され、本庁地区や霞ヶ関地区で遺跡が確認されています。海岸線の上昇した縄文前期では、古東京湾の最奥の貝塚である小仙波貝塚周辺や南大塚（大東地区）、下小坂周辺など台地の縁辺に遺跡が存在しています。

川越周辺で本格的な灌漑稲作が始まったのは弥生時代中期末です。東京湾から現在の荒川（旧入間川）を遡るような形で灌漑稲作をともなう文化が波及したと考えられ、川越城跡や霞ヶ関遺跡でこの時期の集落が確認されています。弥生時代後期になると、長野県域に系譜がたどれる岩鼻式土器という土器型式が分布するようになり、長野県域を起点とした文化の波が川越周辺にまで至っていたことを示しています。

② ヤマト王権につながる首長の登場 古代の川越

定型化した前方後円墳は、地域社会の政治経済を統括した首長の墓として、3世紀中頃畿内で誕生しました。畿内のヤマト王権は、本州から九州にかけて勢力をのぼし、埼玉県内では4世紀の中頃にヤマト王権の影響を受けた前方後円墳が出現します。

川越では4世紀末に三変^{さんぺんいなり}稲荷神社古墳がつけられました。この古墳は、一辺約20mの方墳で方形周溝墓群の南端に、新河岸川の沖積地を見下ろす川越台の東縁、本庁地区の小仙波町にあります。この地区では小仙波4丁目遺跡・弁天南遺跡・弁天西遺跡など、古墳時代に急激に遺構数が増加し、竪穴建物跡や方形周溝墓が多く確認できます。



三変稲荷神社古墳



牛塚古墳出土品

入間川流域には、霞ヶ関地区に牛塚古墳（前方後円墳：6世紀末）に代表される的場古墳群や、5世紀から7世紀にかけて少なくとも27基の古墳があった大東地区の南大塚古墳群があります。そのほか古谷地区に舟塚古墳（6世紀後半）、古谷神社古墳があります。

名細地区のこあぜがわ小畔川流域には、どうまん塚古墳（円墳：6世紀前半）、西原古墳（前方後円墳：6世紀中頃）、下小坂4号墳（前方後円墳：6世紀後半）、小堤山上古墳（円墳：7世紀）などで構成される下小坂古墳群があります。

このように市内各地に古墳がありますが、そのなかでも特に注目されるのは大東地区の南大塚古墳群に属

する山王塚古墳です。山王塚古墳は、7世紀第3四半期の築造と考えられる日本最大の上円下方墳です。

発掘調査で確認された上円下方墳としては6番目の事例で、6基のうち3基は武蔵国に所在しており、とうさんどう むさしみち東山道武蔵路との関連性が指摘されています。また上円下方墳の築造年代はいずれも7世紀後半～8世紀初頭（古墳時代終末後期）の築造です。この時期は有力豪族の連合政権であったヤマト王権から、8世紀初頭に成立する律令国家へ向けた体制の移行期で、激動の時代でした。



山王塚古墳

③ 奈良時代 入間郡の中心として

奈良時代になると、天皇を中心とした中央集権国家が目指され、地方の統治がすすめられました。全国は五畿七道に分けられ、東海道・とうさんどう東山道・北陸道・山陰道・山陽道・西海道・南海道の七道や、各国国府と都を直結する幹線道路が整備されました。

武蔵国は771年に東海道へ所管替えされるまで、東山道に属しており、東山道の本道が信濃→上野→下野→陸奥と伸びる途中で上野国・下野国から武蔵国府へ南下する分岐路が設けられていました。これを東山道武蔵路と呼んでおり、市内の霞ヶ関地区に所在する八幡前・若宮遺跡は武蔵国府から数えて3番目の駅家だったと推測されています。

また、地方には国・郡・里の行政単位が設けられ、川越は武蔵国入間郡に属しました。入間郡の役所である入間郡家ぐうけは霞ヶ関遺跡の一角にあったと考えられています。この地は東に入間川が流れ、西には古代の官道である東山道武蔵路が南北に走っており、水陸両面の交通の要衝でした。郡家の周辺には、政治・経済などの機能が集まり、古代の入間郡の中心の役割を果たしました。発掘された土器には群馬県などの関東近隣の窯はもとより、静岡県湖西窯などの須恵器、畿内産のはじき土師器もあり、遠方から物資

が集まっていたことがわかっています。

④ 平安時代 荘園の開発と武士の活躍

平安時代になると律令制が崩壊し、荘園を管理する武士が台頭します。なかでも桓武平氏の秩父平氏は、11世紀末から勢力を広げ始め、12世紀の末には秩父平氏の流れをくんだ河越氏が、入間川に接した名細地区の上戸に館を構えたとされています。

河越氏のほか武蔵七党の一つ村山党の流れを引く仙波氏は、本庁地区小仙波町周辺から南部に勢力を持っていました。古谷・南古谷地区には、来歴は不明ながら古尾谷氏がいました。

また、平安時代には、今につながる天台宗の寺院が創建されています。9世紀、慈覚大師円仁により無量寿寺（現中院・喜多院）と灌頂院・勝福寺・天然寺・長徳寺などが開創したと伝えられています。

(2) 中世

① 「いざ鎌倉」の時代

源頼朝が鎌倉に幕府を開くと、武蔵武士の多くは頼朝に従いました。河越氏は、源頼朝の信頼を得て、河越重頼しげよりの娘が頼朝の弟義経の妻に選ばれるなど優遇されました。一時、頼朝と義経の不和から勢力を削がれましたが、河越氏は武蔵国内の在庁官人を統括する武蔵国留守所るすどころ惣検校職を相伝した有力武士として、南北朝時代の平一揆へいいつきの乱（1368）まで勢力を保持しました。

鎌倉から埼玉県埼玉県の中央部を南北に貫通して長野県や新潟県に向かう鎌倉街道かみつみち上道がありますが、川越にはその枝道が通っており、「いざ鎌倉」という言葉に象徴される軍事的な目的以外にも物資の流通路としても重要な機能を果たしました。



木造薬師如来坐像（古谷本郷）



河越館跡（上戸）

② 混迷の室町時代

14世紀の半ばに、足利尊氏は、次男基氏を鎌倉におき鎌倉公方とし、関東以北の支配を任せました。しかし、鎌倉公方とその補佐役の上杉氏が争うようになり、さらに上杉氏の中でも山内上杉氏と扇谷上杉氏の間で主導権争いが生じ、関東の勢力分布は、目まぐるしく変化しました。古河公方足利氏及び山内上杉氏と対峙していた扇谷上杉持朝は、長禄元年（1457）に太田道真・道灌親子に命じて、本庁地区の現在の川越城本丸御殿付近に河越城を築きました。戦況が一進一退を繰り返す中、長尾景春の乱の鎮圧など目覚ましい活躍をみせた太田道灌は、主君である扇谷上杉定正によって謀殺され、関東の覇権争いはますます混迷を深めていきます。

その後関東では、蕪山から伊勢早瑞（北条早雲）が台頭し、二代北条氏綱が天文6年（1537）に河越城を掌握しました。その後古河公方及び両上杉氏と北条氏との抗争は続きますが、天文15年（1546）の河越合戦（河越夜戦）で北条方の優勢が確定し、河越は北条氏の支配下に入りました。河越城の城代である大道寺氏は、城の周囲に城下町を形成し、近世における城下の発展の基礎がこのころ造られました。



川越夜戦跡

天正18年（1590）豊臣秀吉は、全国統一を目指して北条氏に大規模な軍勢を向け、各地で激戦となりました。しかし、河越では特に大きな戦いの記録はなく、豊臣方の勢力下に入りました。

(3) 近世

① 徳川家康の関東移封と川越

天正18年（1590）に徳川家康が関東へ移封し、川越には酒井重忠が1万石で入封しました。

江戸に最も近い城として重要であった川越城は、将軍の信頼の厚い親藩・譜代の大名が城主に任じられ、江戸時代8家21人が川越城を守っています。歴代城主のうち酒井忠勝・堀田正盛・松平信綱・秋元喬知・秋元涼朝・松平康英の6人が老中となり、また松平齊典の時代に、その領地は最大17万石となりました。

② 川越藩領と新田開発

川越藩領は歴代城主により大きく異なります。藩主が拝領する領地は武蔵国以外にもありますが、城に付随した城付地は、ほぼ共通しています。城付地は入間郡を中心に高麗・比企両郡にまたがるおよそ150か村で、現在の本市のほぼ全てと、狭山市・三芳町・所沢市・ふじみ野市・新座市・富士見市・志木市・坂戸市・川島町等にまたがる地域です。

川越城下町を中心に、北と東に広がる沖積低地は、入間川・荒川を挟んだ水田地帯であり、この穀倉地帯を守るために、大規模な治水工事が何度も行われました。一方、南西方向は武蔵野台地が広がり、

土地がやせ、水利が悪く、原野として残されていました。松平信綱はこの武蔵野台地の開発を押し進め、さらに柳沢吉保の時代には三富新田さんとめが開かれるなど、この原野に多くの村々が生まれ、広大な畑作地帯が形成されました。

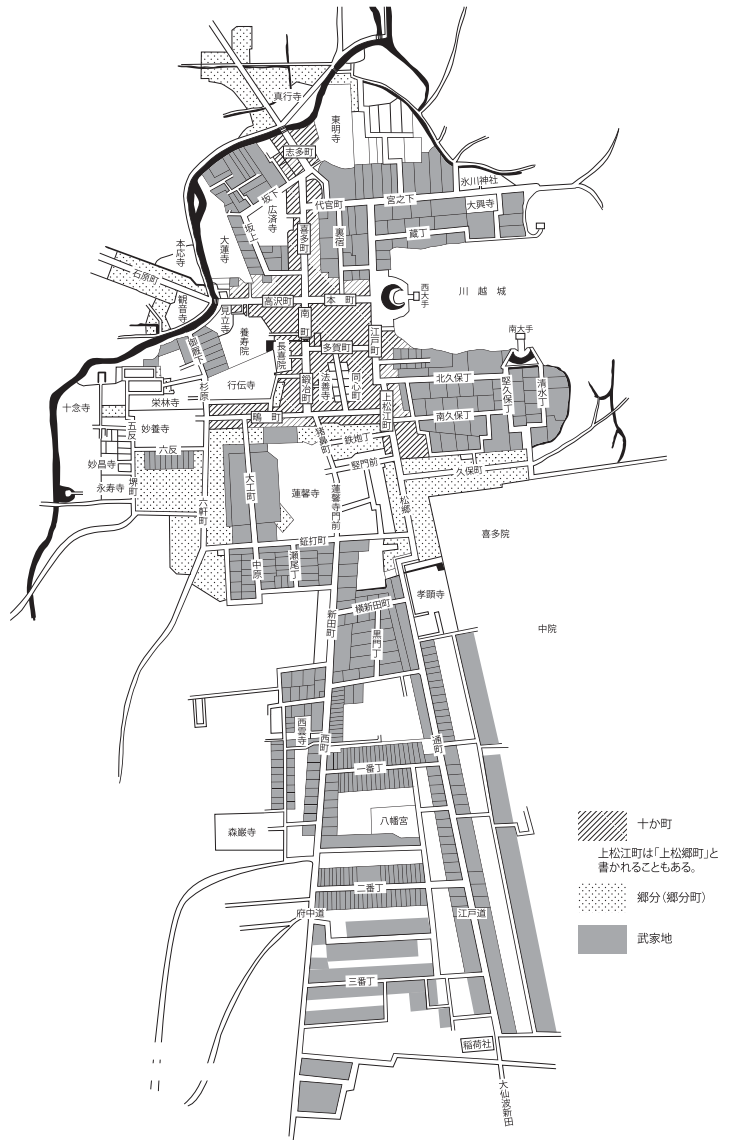
③ 寛永15年の大火と城下町の整備

寛永15年（1638）、川越城下に大火が発生し、城や城下町とともに、造営されたばかりの喜多院と東照宮が焼失しました。翌年川越城主となった松平信綱は、川越城の再建と拡張に着手し、それと並行して城下町も整備されました。まず、川越城の周辺及び街道沿いに武家地が設けられました。町人地は十ヶ町四門前といひ商人町である上五ヶ町（江戸町・本町・高沢町・喜多町・南町）及び職人町である下五ヶ町（多賀町・鍛冶町・志義町・志多町・上松江町）と門前町（養寿院門前・行伝寺門前・妙養寺門前・蓮馨寺門前）からなっていました。

また、徳川家康から秀忠、家光と、三代の信頼を得た天海が住職を務めた喜多院には、この大火後に江戸城二ノ丸から建築資材が運ばれ、喜多院と東照宮が再建されました。

④ 新河岸川舟運と川越街道

松平信綱は喜多院・東照宮の再建資材を運ぶため、新河岸川を改修するとともに、寺尾村（高階地区）に河岸場を開きます。以後江戸と川越を結ぶ舟運の拠点として、新河岸川沿いに上新河岸・下新河岸・牛子河岸・扇河岸・寺尾河岸が開設され、これはのちに川越五河岸と呼ばれました。



川越城下の町割り



川越城本丸御殿

川越五河岸からは、さらに川越・松山・飯能・青梅方面へ河岸道を通して物資の往来が盛んに行われました。運ばれた物資は、川越から江戸に運ばれる下り荷物として、米、麦などの俵物や醤油、酒粕、綿実、そうめん、サツマイモなどがあります。江戸から川越に運ばれる上り荷物では油、綿、太物、砂糖、瀬戸物、干鰯などがありました。特に、18世紀の中頃から武蔵野台地で栽培が始まったサツマイモは、江戸での評判がよく、名産「川越いも」としてもてはやされ、そのイメージは現在も続いています。



新河岸川河岸場跡

なお、陸路では、江戸日本橋を起点とした中山道の板橋宿から川越城に向かう川越街道が整備され、6つの宿場が設置されました。川越街道は中山道脇往還として栄え、川越城主の参勤交代にも使用されています。

⑤ 城下町商業の発達

城下町では領内の農産物や物資の集散地として、早くから定期市が開かれ、商業が発達していきます。江戸時代初期は定期市が商業の中心であり、2・6・9のつく日に開催される九く斎さい市いちがありました。やがて、常設の店舗による商売に移行し、新河岸川舟運による物資の流通で一層繁栄しました。

⑥ 花開く文化

物資の集散地として栄えた川越城下町は、江戸に最も近い城下町の一つであることから、江戸の文化をいち早く取り入れることができました。川越の有力商人や豪農たちは、江戸の文化人と活発に交流し、学問や文芸を身に付けていきました。また、城下町の鎮守である川越氷川祭の祭礼は、江戸の天下祭と呼ばれた山王祭や神田祭の影響を強く受けて発展し、華やかな都市祭礼として現在まで引き継がれています。



川越氷川祭の山車行事

(4) 近代

川越町は明治時代に入っても商業で繁栄し、明治11年（1878）に県下初の国立銀行である第八十五国立銀行が開業しました。新河岸川舟運は、明治時代に最盛期を迎え、明治12年（1879）ころ新たに仙波河岸が新設されました。一方鉄道の敷設も進み、明治28年（1895）に川越と国分寺間に川越鉄道（現西武新宿線・国分寺線）が、明治39年（1906）に川越と大宮間に川越電気鉄道（昭和15年廃止）が、大正3年（1914）に川越と池袋間に東上鉄道（現東武東上線）が、昭和15年（1940）には、大宮から川越を通り高麗川まで、国鉄川越線（現JR川越線）が開通しました。

明治33年（1900）には、県下初の商業会議所が設立されましたが、構成員は、米穀と織物の関係者が多くを占めていました。

明治26年（1893）、川越町の3分の1以上が焼失する川越大火が発生し、大きな打撃を受けました。しかし、川越商人は防火建築として蔵造り町家の商家を次々に建造し、現在の蔵造りの町並みが形成されました。大正時代以降には、埼玉りそな銀行旧川越支店（旧第八十五銀行本店本館）など近代洋風建築が町並みに加わり、各時代の特色を反映した建築が共存しています。



川越市川越伝統的建造物群保存地区



旧第八十五銀行本店本館（埼玉りそな銀行旧川越支店）

(5) 現代

本市は、第二次世界大戦で大きな空襲を受けることもなく、寺社や町並みがそのまま遺されました。郊外に工業団地・商業団地・住宅団地が次々と建設され、一方、台地上では畑作、低地では米作と農業が盛んで、農商工にバランスが取れた都市です。

現在、人口35万人余りの中核市となり、埼玉県内有数の都市として発展しています。

(6) 川越市の沿革

現在の川越市域は、明治4年（1871）に川越藩から川越県となり、その後同年に入間県、同6年（1873）に熊谷県を経て、同9年（1876）には埼玉県に編入されました。

同22年（1889）に川越町として成立後、大正11年（1922）に県内初の市制が施行され、人口30,359人の川越市が誕生しました。その後、昭和14年（1939）に田面沢村^{たのもざわ}を編入、昭和30年（1955）に隣接する芳野村、古谷村、南古谷村、高階村、福原村、山田村、名細村、霞ヶ関村、大東村を合併し、現在の市域となりました。

市域の沿革

年月日	沿革	面積
大正11年12月1日	入間郡仙波村（2,159人）が入間郡川越町（28,200人）に編入合併し、県下初の市制施行（計5,414戸、30,359人）	12.36km ²
昭和14年12月1日	入間郡田面沢村（3,362人）が川越市（34,216人）に編入合併（計37,578人）	16.68
昭和30年4月1日	入間郡芳野村（4,442人）、古谷村（5,247人）、南古谷村（5,428人）、高階村（5,779人）、福原村（5,013人）、大東村（6,920人）、山田村（3,499人）、名細村（5,522人）、霞ヶ関村（6,293人）が川越市（56,711人）に編入合併（計19,799世帯 104,854人）	110.28
平成6年5月1日	川越市、狭山市、日高市の申請により境界修正	109.16

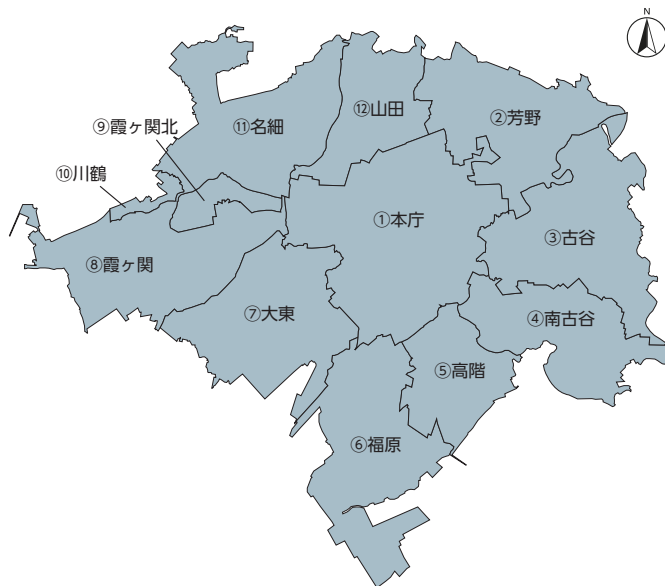
大正11年・昭和14年・昭和30年の資料は、「川越市合併史稿」（昭和41年12月1日発行）より。



市域の変遷（川越市立博物館常設展示図録）

(7) 川越市の地区区分と特徴

現在の川越市域は、昭和30年（1955）に、旧川越市と周辺9カ村が合併して形成されたことから、城下町を中心とする本庁地区と経済や文化の面で強く結ばれながらも、旧村の単位を引き継いだ地区ごとに、歴史的なまとまりが継承されています。



地区区分図

① 本庁地区

昭和14年（1939）当時の旧川越市の範囲で、台地上に形成された市街地は、北部が近世城下町を起源とします。南部は川越駅や本川越駅など、近代になって都市化が進んだ地区でありながら、城下町につながる道が色濃く残り、喜多院をはじめとする古刹など、多くの文化財が集中する地区です。



石原の獅子舞

② 芳野地区

芳野地区は、本市の北東部に位置し、入間川が作った沖積地で、肥沃な土壌には古くから田が開かれ、自然堤防上には集落が形成されました。北から東に入間川が流れ、東側は、荒川の河川敷になっています。



芳野地区の水田

③ 古谷地区

古谷地区は、本市の東に位置し、地区の東には荒川と入間川が流れ、その合流点でもあります。また、西には九十川が伊佐沼から流れ、これらの河川がもたらした沖積地は豊かな穀倉地帯となっています。各集落は、度重なる洪水から家財を守るため、一段高い地盤を築き、その上に土蔵を建てて有事に備えました。これを水塚みづかと呼びます。



水塚

④ 南古谷地区

南古谷地区は、本市の南東部に位置し、古谷地区と同様に河川がもたらした穀倉地帯です。東側は、荒川の旧河道が、西から南は新河岸川が、境となっています。屋敷林を構える豪農の屋敷も見られます。



並木の大クス

⑤ 高階地区

高階地区は、本市の南東部に位置し、新河岸川右岸の台地上にあります。国道254号（旧川越街道）と東武東上線が地区を縦断しており、重要な都市軸となっています。また、地区の北東端を流れる新河岸川に面する一帯には、城下町川越の経済を支えた船問屋の名残も見られ、当時の繁栄ぶりがうかがえます。



船問屋の名残を残す伊勢安

⑥ 福原地区

福原地区は、本市の南部に位置し、武蔵野台地の深奥部にあたります。17世紀半ばの新田開発で形成された地区は、集落の背後に平地林を抱き、南側の通りを挟み広大な畑地が広がる当時の地割が今もよく残ります。



福原地区の畑地と雑木林

⑦ 大東地区

大東地区は、本市の南西部に位置し、武蔵野台地と入間川が作った沖積低地に分れます。台地と低地の西から北にかけて入間川が流れ、南から東にかけて台地が広がっています。入間川による河岸段丘の側の台地に、国指定史跡の山王塚古墳があります。



南大塚の餅つき踊り

⑧ 霞ヶ関地区

霞ヶ関地区は、本市の西部に位置し、南に入間川が流れています。中央部に小畔川こあぜがわが低地を作る他は、その多くが入間台地です。小畔川沿いには、良好な田が広がり、北側の台地の麓には斜面林を背負った集落が続きます。



芳地戸のフセギ

⑨ 霞ヶ関北地区

霞ヶ関北地区は、本市の西部、霞ヶ関地区の北東部に位置し、東に入間川、北に小畔川が流れる台地の上にあります。昭和40年代（1965～1974）に開発された住宅街で、もとは霞ヶ関地区及び名細地区の一部でした。



御伊勢塚公園

⑩ 川鶴地区

川鶴地区は、本市の西部、霞ヶ関地区と名細地区に挟まれた小畔川左岸に位置し、昭和50年代（1975～1984）に、当時の日本住宅公団による土地区画整理事業が行われ、中層の共同住宅と戸建ての専用住宅、整備された都市公園からなる地区となっています。もとは霞ヶ関地区及び名細地区等の一部でした。



川鶴団地

⑪ ^{なぐわし}名細地区

名細地区は、本市の北西部に位置し、東に入間川が、中央に小畔川が流れています。当地区の東側3分の1は、河川が作る低地であり、水田が広がる中、入間台地や自然堤防上に集落が築かれています。

東武東上線霞ヶ関駅と鶴ヶ島駅を中心に市街化も進んでいますが、国指定の史跡である河越館跡や鎌倉街道の一部が残るなど、中世の遺構が良く残る地区です。



河越館跡史跡公園

⑫ 山田地区

山田地区は、本市の北部に位置する入間川が作った沖積平野にあたります。水田と集落が織りなす田園風景の中、国道254号が南北に通ることにより、沿道型の土地活用が進んでいます。住宅開発により都市化が進む中、獅子舞や神事などの伝統行事も盛んに行われています。



上寺山のマングリ